

遠足について

二〇一〇年

集



三
木
安
正

編集部から標題のようないついて何か書くようにといつてきた。一体、どうして私のところに、そんな洋文が来たのか見当がつかないので、おことわりしようと思っているうちに旅に出たので葉書を出し忘れてしまった。締切がせまってからおことわりをしては悪いので、場所ふさぎのようないわゆる「アーリーレイジ」のもので、それを書かざるを得なくなつた次第であつた。

た幼稚教育についてはいくらか關係があり、関心をもつてゐる。そういうものに何か書かそうとするのは、無理なことであり、教育の実際に携さわって日々努力しておられる先生方の実際から生れた研究のみが発言権を持つてゐると思う次第である。ただ私は精神薄弱児たちの遠足に数回ついていつた経験があるので、その経験から遠足について述べることにしよう。

たから、仕事と遊びとか分化していない子供では、大人にとってはレクリエーションである遠足も、そういう意味のものより勉強の一種と考えた方がよいというわけなのである。

それなら子供たちは遠足によつて、何を勉強するべきなのであらうか。

本当は、そういう目標がはつきり定められていいなれば、どういうところに連れて

ところで、私は幼稚園の遠足にはまだ一回も附添つていったことがない。従つて幼稚児の遠足について語る資格は全くない。た

それらの子どもは、精神的な発育からいえば、五、六才以下のものが大部分で、幼

遠足の計画は立たないはずである。遠足とは電車にのって遠いところへいくて、お弁

幼稚園の子どもたちより、知恵の方は低いものが多いので、その経験を頭に浮べながら、幼児の遠足の問題を考えてみようと思う。普通、遠足などのことをレクリエーションといつたりする人があるが、子供の場合遠足はレクリエーションではなく、勉強の一種と考えらるべきであろう。

当をたべてくることだといふやうなことになつてしまふ。そういえば、近頃、幼稚園の子供が、バスにのつて遠足に行く風景をまちで見かけることがある。わたくしも古い考へでは遠足というものは、遠い道を歩くこと、つまり脚を強くする機会であるといふ観念も残っているが、途中の乗物が混雑する当今のことであるからバスにのることはよい考へだが、その場合歩かせることとはどの位考へられているだらうということはほどの位考へられているだらうか附添のお母さん達にしてみればあんまり歩かないで珍らしいものをみて気ばらしされてくるというレクリエーションの意味が果たされるであろうが、子どものための遠足としての意義はどうなるかなどといふことが気にかかることがある。

そこで、子どものための遠足は何を勉強させ子供の理解のためにどんなことが分る機会だらうかということを考へてみると、(1)経験を豊かにすること、(2)行動範囲を広くすること、(3)団体的行動の訓練のために平常より緊張した場面をつくること、(4)普段よりも長時間にわたる団体的行動において、

どういうグループ関係が見られるか、(5)体力について試運転をしてみて、どの位のことがさせられるかということを確認したり子ども自身にとつては彼らにどの位のことが出来るかということの自信を得させること、などが考えられる。

このようないろいろの面について、幼稚園の先生方は、すでに行つた遠足について考へてみたり、これから行う遠足について計画的に考察したら、新らしく、いろいろな知見が得られることと思うが、わたくしどもの精神薄弱児の場合では、(3)、(4)、(5)については遠足というものが、子供たちの勉強にとって非常に大切な機会であり、彼等がよろこび、且つ緊張して行動しようとすると、

去年の春には三崎へバスでいって油壺の水族館をみたり遊覧船で城ヶ島の方を廻つたりした。今年の春は東京湾を七、八百嶼の汽船にのつて三時間もかかつて勝山に行き、そこで小さな水族館をみたり、海女が真珠をとるところをみたりした。今年の遠足のときは、子供たちが、船に対してもつそうした訓練はああした子どもにとつては是非必要だと思うようになつて來たわけであるが、(1)、(2)については、どの位効果があるのかということなど仲々むずかしい問題である。

もちろん、子どもたちは珍らしいことを

見てよろこぶし、帰つてから、描いた絵にそれまで見られなかつたようなものが、経験の効果として現われてくるようになるし与えた刺戟は、もちろん何らかの反応を示すのであるが、それが、何といつても狭い範囲にとどまつてゐるので、生活経験としてどれだけ活かされるかといふようなことを考へると、首をかしげたくなつてくるのである。

をしたりしておいて、遠足当日の観察や、

遠足がすんで後での遊びの変化などをみようとしたのである。たが、思ったほどのこととは出来なかつた。それは、われわれの期待が少し大きすぎたのかもしれない。そのため、観察しようと思うことの網の目が大きすぎて、子どもの方に起つた小さな変化が、その網の目からもれてしまつたのである。

ともかく、水族館での子どもの様子などは前年よりも、一生懸命みていたようだし、船についても前年のような小さな遊覧船で席にすわっているだけなのより、ずっと大きな汽船で、汽缶の運転状態とか、操舵室での船員たちの様子とかを見て歩くことが出来て、興味も深まつたらしいことは事実である。

ただ、そうしたことと彼等の知能がどうまとめてくれるのか、そこからどんな芽生えが出てくれるのかということになると、まだ私自身の考えも一向にまとまらない。

幼稚園の先生方が、上記のようなことに

関心をもたれて、具体的なデータを蓄積してくれれば、実に興味深いことだし、保育

の研究も進歩すると思うのである。

(東京大学教授)

幼稚園教育研究集会実施要領

▷主 催

東京会場——文部省、お茶の水女子大学、東京都教育委員会、東京都、中央区教育委員会、文京区教育委員会

京都会場——文部省、京都学芸大学、京都府教育委員会、京都府、京都市教育委員会、京都市

▷開催期日

東京会場——十月十二日(火)より十月十五日(金)

京都会場——九月二十八日(火)より十月一日(金)

▷会 場

東京会場・お茶の水女子大学(東京都文京区大塚町三五)但し第二日の実地保育及び班別研究は、お茶の水女子大学附属幼稚園、中央区立城東幼稚園、文京区立第一幼稚園、白金幼稚園、感應幼稚園を行う。

京都会場・京都学芸大学桃山分校(京都市伏見区桃山町)但し第二日の実地保育及び班別研究は、京都学芸大学附属幼稚園、京都市立乾隆幼稚園、京都市立生祥幼稚園、平安幼稚園、京都幼稚園で行う。

▷参加資格

(1)幼稚園関係職員、(2)指導主事、(3)教員養成学部教職員、(4)教育研究所々員、(5)小学校低学年担当者、(6)その他